ISSN 0388－5569
VOL 7 NO.3
（通巻 21 号）
1986.10

Library News

山口大学附属図書館報

目次

韓国雑感　藤田則之 ……1
第57回日本医学図書館協会総会を終えて　昼間逸郎 ……3
昭和60年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）案内……4
図書館電算化に「いま」パソコンが面白い！　岡田　隆 ……5
寄贈図書……6
人事異動……6
日　誌……6

韓　国　雑　感

藤　田　則　之

日本の古代文化の伝承のふるさととして、また「近くて遠い」隣国に強い関心を寄せながら、ついぞ訪韓の機会がなかったが、韓国の研究者との学術交流を目的として、今年２回に互って韓国を旅行することができた。専門の仕事に関することはさておいて、今回の旅行では、首都ソウルをはじめ地方都市や農村地帯など、韓国社会の実状に直に触れ、また、新しい友人など韓国の人々の人情に接することができたが、お陰で、南北朝鮮について、また、日本と韓国の課題について、新しく学んだことや、認識を新たにしたことなど、様々な収穫があったと思っている。今回の韓国旅行の印象の一二を御披露させて頂くが、皆様の御参考となれば幸いである。

戦況が次第に悪化して、多くの友人が学業半ばにして戦場に赴くという、戦争末期の激動期に、多感な青春期を過ごした私の心に鮮烈に残る本の一つに、亀井勝一郎の「大和古寺風物詩」がある。

この書によって、大和の古寺巡りに魅力を感じ、飛鳥白鳳の古仏の美に憧憬を抱くようになり、大陸文化の導入で花開いた古代文化史に強い興味を持つようになった。飛鳥白鳳仏の中で、最も心を打たれたのは、法隆寺の百済観音であり、また、広隆寺の弥勒菩薩であった。以来、これらの飛鳥仏の伝来の故地、百済・新羅に微かな憧れを抱いていた。

このようなことから、ソウルでは何よりもまず、国立中央博物館に行き、三国時代の仏教美術、特に、国宝の弥勒菩薩思惟像を見たいと考え、地方都市では是非、百済の古都扶余、公州と、新羅の旧都慶州に旅することを願っていた。しかし、ソウルの国立博物館は旧中央政庁ビルに移転中のため、８月中旬まで休館とのことで、今回の旅行中は断念せざるを得なかった。幸い、忠南大学校訪問の機会に、念願の扶余と公州を訪れることができた。

百済は古代朝鮮の三国、高句麗、百済および新羅のうち飛鳥文化のふるさととして、最も親しみを感じている国である。公州は 513 年に五経博士段楊爾を大和朝廷に派遣した、武寧王の王城として栄えた町で、訪問先の忠南大学校の所在地、太田市からバスを利用して１時間程度の距離にある。

ここの博物館には、武寧王の王陵出土品が展示されているが、往時の繁栄を偲ばせる遺物の数々の中で、王と王妃の金製冠飾は圧巻であった。

公州から美しいキンサシ並木の国道を経て、約40分で扶余に到る。扶余は 538 年仏像と経論を贈り、わが国に仏経を伝えた、聖明王から 122 年間百済の王都として栄華を誇った町である。 660 年に百済は新羅と唐の連合軍によって滅ぼされるが、扶余は徹底的に破壊し尽くされ、現在この町には当時の繁栄を偲ばせるものは殆ど残っていない。ただ、百済の王陵や、博物館に展示された小さい金銅仏や遺跡の出土品の数々が、僅かに当時の栄華を偲ばせるのみである。静かな町並み、鎮山であった扶蘇山のたたずまい、豊かな白馬江の流れなど、山川草木の全てがもの悲しい風情を示している。扶余近郊の王陵群の付近の農村風景には、飛鳥の風物を偲ばせるものがあり、百済の古都

扶余は、なんとも、哀愁と懐かしさのこみあげてくる廃墟の情景である。数少ない百済王朝時代の遺跡を定林寺跡に見ることができる。歴史と共に風化して、面影のさだかでない石仏座像の前に立って、ふと、法隆寺の百済観音の微笑を思い起こした。

現在の韓国は、ハングル文字使用が徹底しており、道路標識や、駅名表示も、漢字や、英語併記が少なく、ソウルの様な大都会や、観光地はともかく、地方旅行ではハングルの知識なしでは歯がたたない。

ハングル文字は、15世紀の中頃李朝の4代目の英主、世宗によって創案制定された、大変科学的で人為的な音素文字である。世宗のただならぬ情熱と努力に関わらずその普及は容易でなく、国字として完全に定着したのは戦後ということである。

日本語の仮名文字は、子音と母音の組合せからなる音節文字であるが、ハングル文字は、一文字が一単音を示すアルファベット文字ということになる。しかし、英語等とは表記の方法が異なり子音字をずらりと横に並べて書くことをせず、子音と母音、あるいは子音、母音、子音というふうに、音節ごとにまとめ書きをする。ハングルの反切表は日本語の五十音表に相当するものであるが、五十音表に比べると、数が多く、約3倍の百四十音表になっている。日本語に比べ母音の種類が多く、子音の発音に複雑なものがあるが、組立が合理的な反切表をマスターすることはそんなに難しいことではない。

日本語とハングルは、語順、助詞の使用法、敬語使用の慣習等、文法的な構成の一致点や、言語的な発想法の共通点が極めて多い。さらに、漢字表現の共通語も非常に多く、われわれには欧米語や中国語などよりも遥かに親しみ易い、また学び易い言葉と考えられる。両国語のこの様な類似性は、二つの言語が同じ系統に属するためだけではなく、古代から現代に至るまでの両国の多様な民族的、文化的交流に起因するものであろう。

韓国では、新聞・テレビや、公私の出版物の中での漢字使用を極力制限する、ハングル文字優位の姿勢を堅持している。しかし、ハングル普及のために行われた漢字制限は、最近ではその反省期に入っているようである。ハングル優位の、ハングル漢字混じり文は、視覚的な訴求力に欠けるため、新聞、雑誌等のマスメディアの分野では、次第に漢字使用が増えていると聞いた。特に、同音異義語の識別性から、法律、経済用語や、学術用語では漢字の使用が避けられず、政府刊行物でも、高次元のものでは、ハングル漢字混じり文ではなく、明らかに漢字ハングル混じり文の感があるといえる。

古代からの漢字伝承の経緯や、近年の政治的、経済的交流などの影響で、発音は異なるものの、日韓共通の漢字表現は極めて多く、その共通表現は、それぞれの文字の本家の中国の比ではない。

学術論文では、さらに漢字優位で、また、用語の共通性も強く、私の専門分野では殆ど同文字の用語が用いられている。ただ、韓国での漢字の略字化は、日本や中国のようには行われていない。

「政府の要請には反するが、日韓学術交流の便からも、益々学術論文の漢字化が進むだろう」と、韓国のある研究者は呟いていた。

この様に、日本語とハングルは文法や発想が同じパターンで、しかも漢字表現による単語の共通性が高いから大変理解し易く、動詞、形容詞や助詞をマスターすれば、文献による日韓相互の学術交流や、意見交換は非常に容易なことである。韓国の研究者には、日本語の会話は不得手でも、文献の読み書きが自由に出来る人が多いようであるが、われわれも、ハングルに対して同じ様に努めるべきだと思った。

韓国人の日本に対する対抗意識は誠に厳しい。歴史的な経緯に起因するものもあろうが、対等な競争相手としての意識も極めて強いように感じられる。また、これに対する様々なリアクションが日本人にもあると思われる。両国の相互理解と、協調的な発展のためには、お互いに肘を張らずにフランクにつき合うことが必要であろう。

今回の訪韓で出会った研究者の多くが日本語が流暢で、ソウルのホテルはともかくデパートの若い女店員からも美しい日本語で応対された。また、韓国の若い人達は、経済、学術、文化等日本に対する関心が高く、日本語熱が強くなっていることも聞いた。今後、両国の経済的交流が益々緊密になり、学術文化の交流も一層盛んになるであろうが、われわれは、最も近い隣人として、また、最も類似した言葉を使用する民族として、理解を深め、心を通じ合うめたには、まず、言葉の障壁を取り除くなど、一層の努力が必要であると感じている。

（農学部教授）

第57回日本医学図書館協会総会を終えて

少し旧聞に属することですが、5月25日(木)、16日(金)の両日に互って日本医学図書館協会第57回総会が医学部第3講義室を会場として、竹尾和典分館長主管のもとに開催されました。

日本医学図書館協会についてはご存じの方も多いと思いますが、ご存じでない方のために少し説明をしますと、昭和2年に新潟、金沢、千葉、岡山、長崎の医科大学図書館5館により、官立医科大学図書館協議会として発足しました。

この時各館所蔵文献の、相互貸借の実施が申し合わされました。

このことは、今日ではごくあたりまえのこととして、図書館界で広く行われていますが、当時としては画期的なことであったと思います。

その後次々と加盟館も増えて行き、名称も医科大学図書館協議会（昭4）、日本医学図書館協議会（昭24）、日本医学図書館協会（昭29）と発展的に改称されて来ました。

その間、重複雑誌の相互補充（昭3）、共同学術雑誌目録の刊行（昭6）、フィルムによる文献複写、相互貸借（昭13）、医科大学総合医書目録（全8巻）の刊行（昭24）、機関誌「医学図書館」の創刊（昭29）等々と斬新的な事業を行って来ました。

そのほか、協会では事業の一環として館員教育にも力を注いで来ており、医学図書館経験3年未満の者を対象とする、医学図書館員研究集会、4年以上の者を対象とする医学図書館セミナーが、毎年開かれ、それぞれ本年で21回と13回を数えています。

また今総会では、協会加盟館館員の海外研修の経費の一部を援助するための、基金が設けられました。

現在この協会には新設の国立医科大学の一部を除く、国公私立大学医学部、医科大学の図書館及び歯学部、歯科大学の図書館と研究所等の図書館101館が加盟しており、今総会にはこれら加盟館よりの館長および司書、来賓等の247名の出席がありました。また本学からは粟屋学長の御出席をいただきました。

協会は創設以来、均質集団による相互協力ということを柱の一つとし、それを維持発展させるために、協会に入会加盟をするには一定の資検基準を満たし、実地調査等の審査をパスすることが求められてきました。

このことは、会員である個々の図書館を充実させ、協会の発展につながってきたのですが、一面、基準に適合していない図書館の入会を認めないということは、閉鎖的であるとの批判も、否定できないことでした。

今日の「情報化時代」を迎え、また医師及び医療従事者の生涯教育とも関連し、協会もこの体質の改善を求められる時期に来ました。

今総会では、これらのことが協議の中心となりました。

これらの協議の他、第一日目（15日）には日本医学図書館協会奨励賞を受賞された、徳島大学近藤英子司書による「日本の医学雑誌の二次資料収録状況」－特に Index Medicus を中心として－と題して研究発表があり、またオランダの Excerpta Medica Foundation より Executive Chief Editor の Dr. Robert Blanken を迎えて「Excerpta Medica データー・ベースと CD－ROM」と題する講演と展示が行われました。

この「CD－ROM」とは Compact Disc － Read Only Memory のことであり、医学における世界的な二次資料である Index Medicus と並ぶ Excerpta Medica のデータ・ベースを optical disc に収録し、これを optical disc reader と personal computer とのシステムにより検索できるようにしたいというものです。

ちなみに本年5月の National Library of Medicine News によりますと、前記の Index Medicus もこの「CD－ROM」を開発したとのことです。

いずれも、まだ市販されていませんが、間もなく市販されることと思われます。

Chemical Abstracts や Biological Abstracts なども、二次資料はすべて printing tipe のものから、この CD－ROM に変わって行くのではないでしょうか。

二日目（16日）には2題の特別講演が行われ、その一つは山口市歴史民俗資料館々長の内田伸氏による「大村益次郎と山口」で、もう一題は朝鮮医科大学教授　李　根培氏による「江戸時代に移

入した朝鮮書籍」でした。

全国から大勢のお客さんを迎えての2日間に亘る会議で、資料作成から会場準備、弁当の用意、接待、懇親会といろいろと大仕事でしたが、なんとか無事に終了できました。

ご協力くださった本館、工学部分館及び中国四国地区各医学図書館の方々や医学部各係の方々とまた医学部教官を始め、同窓会、後援会、医学会等御援助いただいた各位各所には心から感謝しています。

（医学部分館　整理係長　昼間逸郎）

昭和60年度全国共同利用図書資料（大型コレクション）案内

大学名	図書資料名
岩手大	English Reports. Vol. 1（1900）－176（1930）, Index.
図書館情報大	百万塔及び自身印陀羅尼　1基1巻
千葉大	イギリス議会制定法集及び関係資料集 (1) Acts of Parliament from the Reign of George III, 1760－1820 (2) Statutes of the Realm England. 1215－1714 (3) Statues at Large. 1786－1865 (4) Lords Sessional Papers. 1641－1805 (5) The Great Britain, Parliamentary Debates （5－1）Cobbet, William, Parliament History of England. 1066－1803 （5－2）Hansand－Series. 1（1803）～4（1908）
東京芸術大	音楽学学位論文集・交響曲（1720－1820）
横浜国大	Large Scale Topographical Maps in Europe.
金沢大	United Nations Treaty Series. Vol. 1（1946）－1,000（1983）
静岡大	Le Monde.（1944年12月－1983年12月）
京都大	The House of Commons Parliamentary Papers. 1901－1921
京都教育大	師範学校史・各教育史和文コレクション
大阪大	Rare Periodicals & Books in Russian.
兵庫教育大	General Education Collection.
神戸商船大	英国版海図（含むオーストラリア版・ニュージランド版）
島根大	景印文淵閣四庫全書　経部、史部、子部、集部他
愛媛大	商業関係統計表・工業統計表総覧
福岡教育大	Unpublished Dissertations on Educational Administration and Educational Organization.

◎　9月末日現在、参考係で入手した情報です。詳細は（内線788）へお尋ねください。

図書館電算化に「いま」パソコンが面白い！

今、大学図書館は学術情報センター絡みで電算化花盛りの時代を迎えています。電算化といえばすぐに何千万円もするようなコンピュータを思い浮かべるのですが、ここではそれもいいけれど、こんな小さなコンピュターでも結構使えるよということを、これまでの経験を踏まえて述べてみることにします。

(1) 大型機、オフコンもいいけれど・・・

お金もたっぷりあって、人材も豊富であれば、出来るだけ大きなコンピュータを導入することも良いことです。確かに何十台も端末をぶら下げ、大容量のディスクがあればどんなことでも出来るような気がします。（当然まともに動いての話ですが？）。たしかに処理能力やDBMS の性能は素晴らしいものがありますし、データを各端末で共有して処理できることも魅力です。しかし機械が大きければ大きいほど犠牲者（？）も増えてきます。つまりシステムの保守管理の専門家が必要になります。そうなりますと力量のある人はよいですが、私のような凡人は死物狂いで勉強してついてゆくか、落ちこぼれるしかないようです。それにコボル言語の煩わしさ……もっとどうにかならんかなぁと思うのは私だけでしょうか？

(2) 今、何故　パソコンが面白いのか

なんといってもOS（オペレーティング・システム）やシステム環境を気にすることなく仕事の出来ることです。（シングルユーザ用なので当然ですが……）仮にプログラムが暴走してもスイッチを切りさえすれば、後に何の影響も残りません。この安心感は精神衛生上非常に良いものです。これが大型機等になるとそうはいきません。OSやシステム環境・ハードの知識がないと、とてもさわれたものではありません。下手にさわろうものならメッセージの山に驚かされます。何のことやら解らず、かつどうして良いのかも解らない・マニュアルを見ようにもどこを見れば良いのか……

本当に寿命が十年縮む思いがします。

次に注目に値するのは、簡易言語の進歩です。電算化のやり方はいろいろありますが、私は、SE（メーカーのシステムエンジニア）に100％おんぶされた開発には、疑問を感じます。何故ならアプリケーションは生き物ですから、使ううちに必ず不満がでてくるはずです。その時、仕様を検討しSEに変更を要求するやり方のみで良いかどうか考えることが必要ではないのでしょうか。

その点、パソコンにおける最近の簡易言語では、プログラム作成の経験のない人でも簡単に作成することができ、かつ、仕事のさせ方次第では、コボル言語以上のことが出来ます。それも何百ステップもかかるのではなく、ほんの数十行でできてしまうのです。

それから、機種のメーカーが違っても、その機械で動く同じデータベースソフトがありさえすれば、これまで作成したプログラムやデータがそのまま使えるということも大事な点です。同じメーカーでも機種を変えるとプログラムや場合によってはデータまで死んでしまう大型機等に比べ、大きな特徴だといえます。

また、日本語処理が大変楽なことです。これは図書館のような大量のデータを処理するところでは、とても大切なことです。最近開発された連文節変換のプロセッサの早さには驚かされるほどです。またRAM－DISKやCD－ROMの進歩も凄いもので、もうしばらくすればパソコンでギガ単位のデータを扱える時代がくるのではないかとさえ期待させてくれます。

(3) 図書館の電算化に想う

図書館の電算化というと必ず出てくるのが夢のトータルシステムです。しかし簡単に実現出来るものではありません。また、限られたハードウエアを共同利用する場合は、特に運用上の問題が多く生じます。山口大学附属図書館の電算化も稼働後5年がたちますが、特にその中で感じたことを2つばかりあげて終わりにします。

1）電算化する業務をメリットのあるものだけにできるだけ絞り込むことと、導入する機械にやらせるにふさわしい業務をよく練ることが大切です。間違っても、全業務を一つ残らず乗せてやろう等ということは考えない方がよいでしょう。

それと、開発にあたっては、すべての業務に着手するのではなくサブシステム1つずつ確実

に完成させていくことが大事です。そして、一応できあがったプロトタイプをテストランさせ、不満点を修正する。このことを繰り返すことによりプログラムを完成度の高い物にしてゆくことだと思います。

2）開発は可能な限り自館開発で行うことが望ましいことです。ハードは勿論、ソフトだって財産ですので、SEに全部頼むことはできるだけ避けるべきです。自分の仕事をするプログラムが自分達で修正が出来ないとなると、使いがっての悪いまま我慢するということになりかねません。このことが必要以上に電算化不信を作りだしているような気もします。

パソコンの進歩は、これまでプログラムはSEの作るものという時代から、自分の気に入ったように設計作成し、不満点があれば自分で修正する時代への移行を促進していると思います。これは重要なことです。こういった考え方が普及することによって、コンピュータがもっと身近な人間の道具になるのではないでしょうか。

最後にパソコン、オフコン、大型機にはそれぞれ長所と短所があります。それらを如何に有機的に結合させ、業務を処理していくかが私達の課題だと思います。

（参考係　岡田隆）

寄贈図書

（本　館）

鈴木義則（農学部教授）

青木正敏（　〃　助教授）

農業環境調節工学　矢吹萬壽他共著　朝倉書店　1985

熊谷寛次（教養部教授）

生命の七つの謎　ガイ・マーチ著　吉松廣延等訳　白揚社　1986

人事異動

〔退　職〕（61.9.15）

寄恵　由美子　　（医学部分館整理係）

日　　誌

6月11日(水)～12日(木)	第33回国立大学図書館協議会総会（於：東京医科歯科大学）
6月18日(水)	医学部分館図書委員会
6月19日(木)	第47回附属図書館運営委員会
	第18回本館図書委員会
6月20日(金)	工学部分館図書委員会
7月25日(金)	〃　　〃

編集・発行　山口大学附属図書館　〒753 山口市大字吉田　電話（0839）22－6111内線788